



【講演】

立教大学が目指す国際化 —『新しい』グローバル・ リーダーの育成

国際化推進機構長、法学部教授
松井 秀征 氏

○**鹿目** では、続きまして、国際化推進機構長、法学部教授、松井秀征先生のご講演です。タイトルは、「立教大学がめざす国際化 新しいグローバル・リーダーの育成」です。松井先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○**松井** 松井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、私が国際化推進機構長としてお話をさせていただきますのは、「立教大学が目指す国際化、新しいグローバル・リーダーの育成」についてです。【スライド②-1】

初めに、そもそも立教大学がなぜ国際化を目指すのかという点について、少しお話をさせていただきたいと思います。立教大学は、1874年、米国聖公会の宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズが築地に開いた立教学校という学校を起源としております。立教学校は、宣教師が設立した学校ですから、そこで教えていたのは聖書、そして英学になります。

このように、本学はもともと、創立者が外国人であったということ、教えていた内容も聖書や英学ということから、創立時より国際的な学校であったことがわかります。我々の存在理由はまさにここにあるのであり、立教大学のあり方について何かを考えるとときには常にこの起源に遡って、我々の立ち位置を探していくことが必要だと思えます。そして、我々が教育する内容というのは、国境の垣根を超え、キリスト教に基づく人間教育をしていく、ということになります。

立教大学は、かねてから外国語教育に力を入れてきたわけですが、これは建学以来の伝統にのっとっているということが言えるでしょう。また、先ほど丸山教授からもありましたとおり、昨今、国際化の取組みが進んでいるわけです。

が、これも立教大学として当然なすべき教育であり、これに基づいて人間を育てていくというのも我々の1つのミッションであるということになるかと思っております。【スライド②-2】

この点について、もう少し具体化していきたいと思います。我々は国際性を持った教育をするということであるわけですが、その内実をどのように捉えていくか。そこで問題となるのは、立教大学がリベラルアーツ教育を行う大学だということです。では、このリベラルアーツと国際性とはどのような関係に立つのでしょうか。

リベラルアーツ教育とは、もともと、この世界を認識するにはどうしたらよいかという点について、学問的に整えていったものになります。話がそれますが、私は漫画を読むのが大好きなのですが、最近読んだものに『チ。』という漫画があります。これは地動説のために戦う人たちが出てくる漫画なのですが、その中で繰り返し言われるのが、世界を認識するにはどうしたらいいのか、ということなのです。この漫画は完結しているのですが、最後、どのような結論になるかも含めぜひ読んでいただきたいのですが、まさにこの問いかけに対する解を提示する教育がリベラルアーツ教育だといえます。

昔は、まだ世界に対する認識が十分至っていなかったですし、我々を取り巻いているものがどのような成り立ちで動いているのかがよく分からなかったわけです。これに対して今日は、かなりのことが解き明かされてきたのですが、それでもなお社会は不確実であり、冒頭、石川教授からお話がございましたとおり、我々が前提としていた環境がどんどん変わっております。このような状況の中で、我々は、どのようにこの取り巻いている環境を認識していけばいいのか。これが問われるわけです。リベラルアーツというのは、まさにそのための手がかりとなる教育であると思います。

もちろん、古く中世的な考え方から言えば、リベラルアーツといえば、文法学・修辞学・論理学、算術・幾何学・天文学・音楽という自由七科を指しました。当時はこれが世界を認識するために必要な学問であると考えられていたわけです。もちろん今の世界を認識するためには、これにとどまらない学びをしなければいけません。また、その認識をさらに深めるためには、以上の学問内容だけではなくて、どうそれを学んでいくか、どのような手法でその認識にたどりつけばいいのか、ということも含めて考える必要があると思っています。立教大学としては、

リベラルアーツ教育をその教育の基礎に置いている以上、学生がよりよい世界認識をなすために、我々として、何を教育として行っていけばいいかということを考えているわけです。

この点については、現在の西原廉太総長の下で『大学運営の基本方針』が示され、その中にも書き込んでいるのですが、リベラルアーツ教育というのは、その学びを通して、学ぶ者が世界を読み解く力、そして世界を変えていく力を身につけることを可能にする教育なのだと言いつけております。

この内実は、先ほど申し上げたように、今の変化の激しい世の中で、我々は何を学び、それをどのように学んでいけば、世界をよりよく認識できるのか。そしてそれに働きかけ、変えていくことができるのか。こういったことを今、立教大学は必死に考えている、という状況にあります。

そのような力を学生が身につけるためには、あるいはそれを可能とする教育を行うには、教育の方法、内容も当然、多様な価値観を内包していないといけないだろうと思います。冒頭の石川先生のご挨拶を借りれば、寛容でなければならない、と思うわけです。**【スライド②-3】**

ここに、国際化という話が出てきます。立教大学がもともと国際性を持った大学だということは申し上げましたけれども、我々がこのリベラルアーツ教育を謳い、世界認識のための縁（よすが）を学生に与えていくというのであれば、当然、多様な価値観をその教育の内容や方法に含んでいなければいけないし、国際的な要素は含んでいなければいけない。そして国際性を持った大学である立教大学であれば、当然やらなければならない、こう考えているわけです。

これが立教大学の成り立ち、我々がやっているリベラルアーツ教育、そして我々の国際性をつないでいく線になります。これをもう少し申し上げるならば、立教大学で学ぶならば、その多様な価値観を身につけられるように、キャンパスの中にまず多面的な環境を設けていかなければいけない。それは生活言語を異にし、生活背景を異にする者が集まり、その中で自由に意見交換ができるような場、そして多様な価値観に触れられる場、これをまず設けていく必要があるだろう。そうであれば、留学生が集まり、異なる価値観をぶつける場が用意されなければならない、そのための言語として、留学生が日本語を学べば日本語でコミュニケーションすればいいですし、これと同時に英語をはじめ日本語ではない言語でもコミュニケーションができる場というのは設けていきたい、ということになる。

あるいは、立教大学で学ぶという選択をした受験生——これは主に高校生になると思いますが——に対しては、立教大学を通して、あるいはそのキャンパスを出て、そして自らの慣れ親しんだ生活環境や価値観を脱ぎ捨てて、新しい視点を獲得できるようにしたい。立教大学に來れば、あるいは立教大学を通れば、そういった機会を獲得できるようにしたい。それを我々は環境として用意したいと思っているわけです。そうしますと、もちろん物理的に留学はしてほしいのはもちろん、場合によっては、昨今の条件もありますので、オンラインという手法を使って、容易に国境を越え、学びの機会が与えられるようにしたいと考えています。

つまりキャンパスの中にも多様性、多元性があり、キャンパスを通して外に出ても多様性や多元性を得られる。それが立教大学という学びの場が用意している環境であり、そこで学べば何らかの形で国際的なものに触れられる。多様な価値観に触れられる。そしてそのことを前提として世界を変えていける力が身につけられる。これを我々は実現したいと考えています。**【スライド②-4】**

さて、ここまでが理念的な話でありますけれども、では立教大学が今、何やっているのか、という具体的な内容がここからの話になります。これは少し戦略的な話になりますが、立教大学の現在の国際化の前提にあるのは、2014年に策定されました「Rikkyo Global 24」という取組みになります。これは随分と前の話になるのですが、2024年に立教大学、立教学院は創立150周年を迎えますので、ここに向けて、本学は国際化を進めてまいったわけでありまして、ここで目指しているのは「専門性に立つグローバル教養人」の育成です。この人材像も、非常に抽象度が高く、これだけでは何を言っているのかよく分からないのですが、これは、先ほどのリベラルアーツ教育で育てたい人材と内実は同じだと考えています。ベースにあるのは、教養を持ち、専門性を持ち、世界をきちんと認識でき、日本語も英語も、あるいはそのほかの外国語も使えて自分の考えを発信できる。こういったことを考えているわけです。かなり欲張りなのですが、これが立教大学の教育が目指す人材像ということになります。

この国際化の取組みにおいて、立教大学は、具体的には4つの分野で目標を設定しておりました。第1に、海外への学生の派遣を広げていくという話。第2に、先ほど丸山先生からもありましたとおり、外国人留学生の受け入れを広げていくという話。第3に、以上のように日本から旅立っていく学生、あるいは

日本に来る学生のために、立教大学として教育・研究環境を整備する、という話。この中には、様々な科目の展開の中で多文化を学べるということもありますし、外国語でも学べる科目を増やしていくということもあります。そして第4に、以上の取組みを組織として取りまとめていく、という話。これはガバナンスの問題でもありますけれども、国際化推進機構という立教大学の組織が出来上がったのは2015年でして、まさに上記の取組みを開始した時期と軌を一にしていることとなります。

そのほかにも、様々な細かなプロジェクトがありますが、本日はその詳細については割愛させていただきたいと思います。いずれにしても「Rikkyo Global 24」の下で、文部科学省の大型補助金である、いわゆるTGU（スーパーグローバル大学創成支援事業）に採択されまして、この8年間、積極的に国際化の取組みを進めてきたところでございます。**【スライド②-5】**

さて、近いところで、今、立教大学が何をやっているのかということを紹介させていただきます。立教大学では、私立学校法の規定に基づいて中期計画を作成し、この計画に従って様々なプロジェクトを進めているのですが、2022年から26年における国際化関連事業として、4つ、ご紹介します。第1は、今、申し上げましたスーパーグローバル大学創成支援事業です。この事業は2014年から始まっていますので、23年度で終わります。先ほどの繰り返しとなりますが、この事業の下で、本学の学生を外国の大学に送り出していく。あるいは外国から留学生の皆さんに来ていただく。そしてそれに伴って、大学の教育内容や支援体制を国際化していく。このような取組みを進めてきています。

この事業の下では、日本の大学の国際化をけん引する、立教大学が1つのモデルとなるようなものをつくり上げていくということが想定されています。そして、それを他の大学に対しても広げていけるような展開力、あるいはその取組みの中で、立教大学自身がどんどん変わっていくという自己変革力、こういったものを持った大学を目指しております。これができているかどうかは、我々自身の自己評価が必要ですし、外の皆さんからの評価も仰がなければなりません。ただ、私が大学の中から見る限り、立教大学は、相当に変わってきたように思います。前国際化推進機構長である池田先生は、本当に様々な取組みをしてきてくださっていて—この後、具体的な事業も出てきますけれども—この数年間に随分と変わったという感覚がございます。**【スライド②-6】**

第2は、「Rikkyo Study Project」、RSP事業です。この事業は、TGU事業の具体化という面がございませぬ。TGU事業では、外国からの留学生の受入れ、それによる学生の多様化を目指してございませぬ。これは先ほど申し上げた話ですが、立教大学のキャンパスの中にいれば、多様な背景を持っている学生がいて、その中で様々な学びがございませぬ。こういう環境をつくりたいわけですが、まさにこれを実現するためのプロジェクトです。特に正規留学生を増やしたい、つまり1年次から4年次まで立教大学に在籍して、学位を取るところまで立教大学にいてほしいということだ。この事業は、多文化共生の観点から、グローバル社会に関わる人材の育成を目標とするという目標を掲げまして、2022年秋からスタートする、つまりこの秋から始まるということだ。これはまさに、前国際化推進機構長である池田先生の下で仕組みの骨格が出来上がり、今、ようやく目の見るに至ったプロジェクトです。【スライド②-7】

この事業の内容をもう少し具体的に言いますと、まず外国の高校を卒業した学生を受け入れたい、ということを考えてございませぬ。この点について何が今までと違ふのか。従来、立教大学に入学する正規留学生は、日本語で専門を学べるレベルまで日本語がでなければならなかつた。つまり、立教大学に来る前に、十分に日本語の勉強をしてきてください、という話だ。しかしこれでは、大学としての多様性の確保という話にはなかなか結びつかないのだ。そこで、日本語の力が学部の授業を履修するレベルまでいってなくても、場合によっては日本語が全くできなくても、まずは立教大学に入ってきて、そこで学んでほしい。そこで、RSP事業では2つのプログラムを用意した。1つは、NEXUS Programという、主にアジアの高校を中心に立教大学と協定を結び、専門を学べるレベルまでいってなくても、たとえばN3程度の日本語レベルであっても、まずは立教大学に来てもらって、日本語教育センターで日本語をしっかり半年間学んでもらって、各学部に入ってもらうという仕組みをつくりました。

もう1つは、PEACE Programというプログラムだ。このプログラムでは、そもそも日本語がでなくてもいい。立教大学へ来てもらって、英語のみで学べるコースに入って、学位を取ってもらう、ということだ。もちろん日本で生活するには、ある程度日本語できないといけなないので、日本語教育センターにおいて、生活がございませぬレベルの日本語は必ず学んでもらいます。このような仕組みで学生をサポートしつつ、立教大学という場に入ってもらって、キャンパスの多様

化に貢献してもらえよう、取組みを進めてきたところでございます。

RSP 事業の 2 つのプログラムでは、この 9 月から 5 名の学生が入ってきます。次年度以降、さらにこれを増やしていけるように、引き続き、国際化推進機構では取組みを進めているところでございます。【スライド②-8】

第 3 は、大学の国際化促進フォーラム事業です。TGU 事業は、先ほど大学の展開力という話を差し上げました通り、各大学の取組みを他大学に広げていく、あるいは日本に広げていくということを想定してまして、それぞれの大学のその成果を大学間ネットワークで展開していくというのがこの事業になります。立教大学は、現在、明治大学、関西大学とプロジェクトをこの事業を推進しております。ただ今日は、この詳細については割愛させていただきます。【スライド②-9】

そして第 4 は、大学の世界展開力強化事業です。これも非常に大きなプロジェクトで、文部科学省の補助事業となっておりますけれども、現在、動き出したところです。この事業の下で、本学は、ソウル大学校、北京大学、シンガポール国立大学とコンソーシアムを組むことができました。共通テーマはリベラルアーツ教育で、この共通テーマの下で大学間のコンソーシアムをつくり、学生を相互に派遣し合うという仕組みを設けております。もっとも、このような大きな話がいきなりやってくるわけではありません。TGU 事業の取組みの中で、2017 年、立教大学は GLAP という英語コースをつくりました。この取組みの存在を知ったソウル大学校の方が、立教大学で、リベラルアーツ教育を英語だけでやっているプログラムがあるということで、話がやってきたのです。このことの教訓として、やはり何か動けば、何か仕組みをつくれれば、そこを手がかりに物事は展開していく。だからやはり仕組みはつくらなければいけないし、やれることはやっておかなければいけない。そのようなあまりにも当たり前のことを、この世界展開力事業の話が来たときには感じておりました。

この世界展開力強化事業で我々が非常にありがたいと思っているのは、リベラルアーツ教育について我々は一生懸命定義をしてきましたけれども、これを国際的にどう考えればいいのかという手がかりを得たことです。このコンソーシアムの中で、国際共同副専攻を設定しようとしているのですが、例えば立教大学の学生がソウル大学校、北京大学、あるいはシンガポール国立大学の科目を取って、1 つの副専攻の課程を終えました、という形を取りたいと思っています。そして、それはリベラルアーツという観点から整理していこうと考えており、そうします

と、国際的に意味のあるリベラルアーツとは何なのかという議論になり、今、これを4大学で詰めているところです。【スライド②-10】

さて、具体的に世界展開力強化事業で立教大学の学生がどう動いていくのかという話をします。①は、2022年春学期で、これは今ですね。立教大学の学生は、出願をして、実際に留学に行くための段取りを進めています。経営学部から2名、異文化コミュニケーション学部から2名、そしてGLAPから2名、6名の学生がこの秋から動き始めます。まず、もちろん語学力が求められます。全て英語ですから、それが前提になります。また、中国や韓国に行く可能性がありますから、できれば生活レベルくらいの中国語や韓国語ができたほうがよいので、このうちいずれか一つのトレーニングもします。②は、2022年秋学期で、ここからまず半年間の交換留学に出ます。今回、ソウルと北京の選択肢があったのですが、残念ながら北京は今の中国の新型コロナウイルス感染症の問題に伴う入国制限で、入国がうまくいかないものですから、4名の学生がソウルに行き、2名の学生は北京大学の授業をオンラインで聞くことになっています

③は、Winter Intensive Programで、これを冬休みに行います。④は、2023年春学期で、これは②とは異なるパートナー大学に行くことになります。例えばソウル大学校に行った学生は、シンガポール国立大学、あるいは北京大学に行く。要は、2022年秋学期とは違う大学に半年間行きます。その後⑤は2023年の夏休みになりますが、再度Intensive Programに参加して、日本に帰ってきてからは、⑥のオンライン科目で、交換留学で行かなかった残り一つの大学のオンライン科目を受講します。そして最後に、どれくらい語学力が伸びたかを確認してプログラムが終わります。

今は、立教大学の学生を基準に話しましたが、ソウル大学校はソウル大学校で同じように動いていく学生がいますし、北京大学、シンガポール国立大学も同様です。この秋から、立教大学にもソウル大学校の学生が3名やってきます。北京とシンガポールはまだ動いていないので、恐らく来年以降になりますけれども、こういった学生が本学に入ってくることになります。【スライド②-11】

ちなみにこの事業で育てたいのは—また違う表現を使っているのだから—、くいのですが—、「アジア発未来共創型グローバル・リーダー」です。これも、ベースになっているのはリベラルアーツ教育を経て育つリーダーです。このリベラルアーツ教育の中身として、この世界展開力事業では、少なくとも次の

ようなコアスキルを身につけてほしいということを置いています。このスキルとは「Critical thinking」「Collaboration」「Communication」「Consilience」「Challenge」「Cosmopolitan」の6つの内容です。こういった要素がリベラルアーツ教育の中には必要で、科目としても、これらのスキルが身につけられる科目をきちんと考えていきたいと思っています。

このようなコアスキルという概念を共有し始めたことで、立教大学のリベラルアーツ教育というものが果たして国際的に耐え得るものになっているだろうかということ、これから我々も確認をしていかなければなりません。**【スライド②-12】**

さて、今日のこの後のテーマになっていくところで、この国際化を通じてどのような人材を育てたいのかという話を申し上げたいと思います。この国際化は、繰り返しますとおり、リベラルアーツ教育を基礎として出てくるものであり、立教大学の成り立ちの下に出てくるものであります。また、今日は詳しくお話しすることはできないのですが、立教大学の教育の特色として、リーダーシップ教育というものもございまして、これを掛け合わせてリーダー像をつくっていききたいと思っています。

繰り返しになりますが、今は変化が激しい時代であり、世界は先が見通せなくなっています。恐らくほとんどの人は、5年前、ロシアとウクライナが今のような形で戦争をするとは思っていなかったのではないのでしょうか。あるいは3年前、新型コロナウイルス感染症がこのように流行し、我々の生活形態が全く変わるということも分かっていなかったでしょう。未来は何が起ころか分からない。3年先、5年先のことは全く分からないという状況です。そのような中で、なぜ、今、世界はこのように動いているのか。そこには、どのような意味があるのか。そこで、あなたたちは何ができるのか。こういったことを我々としては大学の中で訴えかけていきたいし、学生たちにそれにこたえる力を身につけてほしい。そのためにカリキュラムを整え、様々な仕組みを整え、各学部へ訴えかけ、教育内容として取り込んでいきたいのです。

幅広い知識や教養を身につけてもらいたい。学びの中で、批判的な思考力を身につけてもらいたい。そういった様々な知識や教養から、複眼的、多角的に物を見てほしい。1つの課題にアプローチする方法は1つではないのです。例えば人種の問題にアプローチするのであれば、歴史の面からアプローチしてもいいし、

社会的にアプローチしてもいいし、あるいは遺伝学的にアプローチしてもいいし、いろいろな方法があるわけです。複眼的な視点を持ち、それを統合していきながら物事に迫ってほしい。

また、1人の人間がやれることは限りがあります。そこで、物事を捉えるときにはチームを形成し、あるいは共同作業を行い、こういった中で物事を捉えてほしい。それがあって、この複眼的な視点、あるいは批判的な思考力というのがより実効的に担保できることとなります。そのチームの中で自分の役割を見つけつつ、仲間と協働し、意思疎通をし、そして問題解決に進んでほしい。そして最後にそれを発信してほしいのです。そのために、できれば日本語、英語、さらに他の外国語というように、複数の言語でそれを発信できるようになってほしい。これが物事を、そして世界を、どのように捉え、どのように意味づけ、そして自分がどう変えていけるかということにつながっていくのだと思います。【スライド②-13】

そのために立教大学は、先ほど申し上げたように、学生を積極的に海外に送り出し、外国からの留学生に積極的に来てもらい、そして学内ではリベラルアーツ教育、複言語による教育、そして常に異文化体験を得られるような、そういう取組みをしていきたいと考えているわけです。これによって、TGU事業にいう、自ら考え、行動し、世界とともに生きる新しいグローバル・リーダーの育成、あるいは世界展開力強化事業にいう、アジア発未来共創型のグローバル・リーダーの育成が可能になるのではないかと考えている次第です。【スライド②-14】

えらく大層なことばかり申し上げて恐縮でございますが、この後、皆様から、より実のある話が聞けるのではないかと思いますので、導入の話としてはここまでにさせていただきたいと思います。拙い話にもかかわらず、ご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。【スライド②-15】

○鹿目 松井先生、ありがとうございました。

では、短く質問の時間を取りたいと思います。ご質問のある方、ご来場の方は挙手を、オンラインでご参加の方は、Zoomの「手を挙げる」のボタンを押してください。ご質問の際には、初めにご所属とお名前をお願いいたします。

○藤野 どうも。今日は池田先生の講演があるので来てみました。城西大学の藤野と申します。立教大学が非常に国際化されているということは、よく私も理解しているつもりなのですが、日本語の講義、日本語の能力ということも何か触

れましたけども、英語での講義というのは、立教大学はかなり学部生なんかにも浸透しているのでしょうか。

○**松井** ありがとうございます。英語による科目は、今の目標値としては授業全体の20%を目指しています。ただ、これにはなかなか難しいところもあります。英語で授業を受けることに能力として達している学生、そうでなくても、英語で授業を聞こうと挑戦している学生、こういった学生については、英語での授業を聞いてくれるのでよいのです。しかし、関心はあるけども、英語で授業を受けるには心理的に距離がある学生、あるいはそのような授業にそもそも関心がない学生もいます。立教大学は、今、大体9%くらいまで英語の授業の割合を上げてきて、20%を最終的に目指してはいるのですが、9%くらいの割合になると、開講しても誰も履修しないという科目が出てきてしまうのです。ですので、今のところ、全体の9%といったあたりが、現在の立教の学生の力でちょうどいいくらいの数になってきている、ということはあると思います。

今後は、英語の授業に関心はあるけれども腰が引けてしまっているという学生に対してどう働きかけていくか。あるいは、そもそも英語で学ぶ、外国語で学ぶということに、あまり関心がないという学生に、どう意識喚起をしていくかといったことが大事だと思っています。これは結局、授業以外のところでどういった仕掛けを大学としていくか。例えば、留学生と触れ合う機会とか、あるいは国際的なことに関して意識喚起をするようなイベントであるとか、もちろんそのような中に英語の授業もあってもいいのですが、こういったことが大事ではないか、ということは今、関係者では話しているところです。

○**藤野** すみません、私は理系の出身なのですが、私が今いる大学は文系がかなり占めていて、日本の文系の難しさというのは、やはり4年で終わるとこのことの限界、つまり高学歴という言い方がいいかどうか知りませんが、もう2年やったらいろいろなチョイスが含まれると思うんですけど、社会がなかなか、そういうディグリーの高い人を、文系があまり迎えるような感じがしないので、そこから根本的に変えていかないと、文系の教育が、いい方向にと言ったら失礼ですけど、向かわないんじゃないかと思うのですが、そういうところを社会にどう訴えていくかというようなことは何かお考えとか、アクションがいろいろあるのでしょうか、立教大学では。

○**松井** 社会に対しての訴えかけというとなかなか大きな話で、立教大学だけで

できる話でもないのですが、まず我々の中でできる実験的な取組みとしては、先ほど申し上げた GLAP という取組みがあります。これは、リベラルアーツ教育を基礎とした取組みで、基本的にはある種の教養的な色彩を持っているプログラムなのです。ですので、この GLAP の学生には、大学院に行って専門性を身につけてほしいということを言っています。GLAP は、2017 年から始めて、2021 年に最初の卒業生を送り出したのですが、その時はコロナの真っただ中で、なかなか外国の大学院には行けませんでした。ただ、この学生たちを見ると、やはり高い専門性を身につけるためには大学院に行かなければいけないし、英語のできる学生なので、できれば海外の大学院に行きたいということは言っています。

GLAP については、学修を進めるためにベースとなる非常に高い思考力と、そして発信力を持っている学生が、外国の大学院で専門性を身につけて、その後、日本に戻ってきて活躍する、あるいは世界で活躍するといった例、1 つでも 2 つでもロールモデルになるような例が出てくればよいと思っています。教養と専門性がきちんと身についた人材こそが、まさに社会で活躍できるということが分かるようになって、それが日本の社会に少しずつ浸透していけば、だんだんと変わっていくだろうという気がしています。2 年、3 年の即効性ある取組みはできないのですが、我々としてはそのようなことを 10 年単位で考えてやっていたらと思っています次第です。

○**下寄** 非常に興味深いお話、ありがとうございました。私、立教大学を卒業、学部と院を卒業しまして、異文化コミュニケーション学部と研究科を卒業しました下寄と申します。現在は神田外語大学で国際センターのようなところで留学生の派遣と受け入れを担当しているところでございます。私から 2 点お伺いしたいことがございまして、まず 1 点目ということで、学びきっかけづくり、様々な多様性だったり価値観に触れるきっかけづくりが大事だということで、現在、様々な取組をなされているところだと思います。その中で、課題の 1 つとして外国語だったり、国際性だったり、そういうところには興味のない学生をどのように巻き込んでいくか、取り込んでいくかということが 1 つの課題としてあると思うんですけど、そのほかに何か現在、直面している課題と申しますか、ここを乗り越えれば一歩大きな前進ができるということが何かあるのかということ、1 つ。

もう一つ、立て続けに質問しても大丈夫ですか。もう一つなんですが、今、

ACEプログラムであったり、他大学も巻き込んだコンソーシアムだったり、様々なプログラムを展開していると思います。その中で、最近、高等教育の中で、ラーニングアウトカムだったり、学習効果、成果というものがかなり注視されてきていると思うのですが、その帰ってきた後、4年後に学生がどのように成長したのかというところ、それは具体的にどのように、その成果測定といいますか、考えていらっしゃるのでしょうかよろしくお願いします。

○**松井** ありがとうございます。どちらも非常に難しい質問で、我々も教えていただきたいぐらいのところですよ。1点目の我々が抱えている課題ですが、国際的なことに触れる機会を学生に与える場合、外国語で行う授業が必要となるのですが、実は、そのような授業を行える人材がそれほど日本国内にいるわけではないのです。我々として、学生に対して十分に英語で学ぶ機会を与えようとする、そのために教える人が必要になって、これを用意していくというのは、日本国内にいる限りはそんなには簡単ではない。ですので、この点は組織として計画的にやっていかなければいけないというところはあろうかと思っています。

その他、外国の大学と連携をするときに、日本の4月に始まって3月に終わるという学年暦は、結構障害が多いです。少しずつ、9月入学の仕組みをいれたり、あるいは、多少の学年暦のずれがあっても、きちんと教務的に対応できるように努力はしたりしていますけれども、やはりそういうテクニカルなところで苦労することが多くて、どこかで抜本的に変えないと駄目なんじゃないかと思う瞬間は、国際化の責任者をやっていると感じるところはあります。

2点目のアウトカムの測定の仕方については、今、まさに世界展開力強化事業のところをやっているのですが、ルーブリックによって学生たちの能力を測っていきたく、まずは確認をしたいということで取り組んでいるところです。本学には大学教育開発支援センターという組織があり、ここでは、こういった指標で、こういった統計を取れば、そこを測れるのかを研究しているのですが、この点は走りながら考えている、このような状況です。

○**鹿目** ご質問ありがとうございました。

大変興味深いテーマですから、皆さんたくさん質問したいと思われそうですが、また後ほど質問する時間を取りたいと思います。

【スライド②-1】

立教大学が目指す国際化
— 『新しい』 グローバルリーダーの育成

2022.7.9
国際化推進機構長 松井秀征

【スライド②-2】

1 はじめに

- ▶ 立教大学が有する本来的な国際性
 - ・立教大学の成り立ち
 - 1874年、米国聖公会宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズが築地に開いた立教学校 (St. Paul's School) にさかのぼる
 - この学校で教えられたのは聖書と英学であって、本学は、創立者はもとより、教育内容を見ても、その創立時から国際性を有していた (その成り立ちから国境の垣根を超えた「キリスト教に基づく人間教育」)
 - たとえば、立教大学がかねてより外国語教育に力を入れてきたことは、建学以来の伝統に則ったものであるし、国際化を推進することも同様に理解可能

2

【スライド②-3】

1 はじめに

- ▶ 立教大学の重視するリベラルアーツ教育
 - 『大学運営の基本方針』（2021年7月）
 - ・立教大学として、改めて「リベラルアーツ教育」を重視する方向性を明確にしている
 - もともとは世界認識のための基礎的な学力
(自由七科：文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽)
 - リベラルアーツ教育とは、その学びを通じて、学ぶ者が「世界を読み解く力」を、
そして「世界を変えていく力」を身につけることを可能とする教育
 - そのような力を身につけることを可能とする教育を実現するためには、
教育の方法においても、内容においても、多様な価値観が内包されたもので
なければならない

3

【スライド②-4】

1 はじめに

- ▶ リベラルアーツ教育と大学の国際化との関係
 - ・教育の方法や内容に多様な価値観を内包することを求めるのであれば、そこに国際的な要素を導入することは必然
 - 立教大学において学んだ学生ならば、そのキャンパス内にいながら多面的な環境に身を置き、
多様な価値観に触れることができしてほしい。そうであるとするならば、留学生が集い、異なる
価値観を日本語ではない言語を通じてぶつけ合う機会を用意することは不可避
 - 立教大学において学ぶ選択をした学生ならば、そのキャンパスを飛び出て、自らの慣れ親し
んだ環境や価値観を脱ぎ捨てて、新しい視点を獲得することができるようにしたい。そのた
めには、物理的に、あるいはオンラインで、容易に国境を超え、学びの機会が設けられるこ
とが必要
 - そのような仕掛けがあることによってこそ、立教大学という学びの場を通った学生は、世界
を読み解くことができ、世界を変えていく力を身に付けられるに違いない

4

【スライド②-5】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ Rikkyo Global 24
 - ・ 2014年5月公表、2024年の創立150周年に向け推進する大学の国際化に向けた取り組み
 - ・ 「専門性に立つグローバル教養人」を育成し、国際社会に貢献できる大学を目指す
 - ・ 4つの分野で目標を設定
 - ① 海外への学生派遣の拡大
 - ② 外国人留学生の受け入れの拡大
 - ③ 教育・研究環境の整備
 - ④ 国際化推進ガバナンスの強化
 - ・ 以上の目標を達成するために取り組んでいる24のプロジェクトの総称
- ※この国際化推進の枠組みの下、スーパーグローバル大学創成支援事業に採択

5

【スライド②-6】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
 - ① スーパーグローバル大学創成支援事業（TGU事業）
 - ・ 2014年度から開始された補助事業であり、本学学生の外国の大学への送り出し、外国からの留学生の受け入れ、及び上記に伴う大学の教育内容ならびに支援体制の国際化を図る
 - ・ 上記の取り組みによって、日本の大学の国際化をけん引する創造性、展開力、そして自己変革力を持った大学を目指すとともに、「専門性に立つグローバル教養人」の育成を目指す
- ※補助期間が2023年度で終了することから、残り2年間の取り組みを充実させる方向で検討中

6

【スライド②-7】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
 - ② Rikkyo Study Project（RSP事業）
 - ・ TGU事業の下では、外国からの留学生受け入れ、それによる学生の多様化、キャンパスの国際化を想定している。このうち、とくに正規留学生の受け入れを増やすための特別対応を行うプロジェクト
 - ・ 多文化共生の観点からグローバル社会に関わる人材の育成を目標として2022年秋からスタート



7

【スライド②-8】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
 - ② Rikkyo Study Project（RSP事業）
 - ・ 正規外国人留学生の受け入れ増による学生の多様化を目指す事業
 - 外国の高校を卒業した学生を受け入れる本格的なプログラム
 - 従来、立教大学の正規留学生は、日本語で専門を学べるレベルに達したことを前提に受け入れていたが、RSP事業においては、そのようなレベルに達していなくても受け入れることを前提

【参考①: 2022年度以降の外国人留学生募集の仕組み】

制度の名称	求める日本語能力のレベル(目安)	履修する授業
外国人留学生入試(従来どおり)	N1程度	日本語が中心
NEXUS Program(新規)	N3程度	日本語が中心
PEACE Program(新規)	不問(ただし高い英語力を求める)	英語のみ

※ 2022年9月より新設するNEXUS ProgramとPEACE Programを総称してRikkyo Study Project（RSP）とさせていただきます。

日本語能力試験にはN1～N5までのレベルがあり、N1が最も難しく、N5が最もやさしいレベルです。

8

【スライド②-9】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
 - ③ 大学の国際化促進フォーラム事業
 - ・ TGU事業の成果について、大学間のネットワークにより、他大学に水平的に展開することを目指すとともに、本学も他大学からの成果の共有を受けて、日本国内の大学の国際化を一層促進することを目指す事業
 - ・ 本学は、明治大学、関西大学と連携するプロジェクトに参加する予定であり、外国の大学とのオンライン交流、あるいは各大学の海外拠点を中心とした集合型交流などを想定
- ※本事業は、国による3か年度の補助事業

9

【スライド②-10】

2 立教大学の国際化戦略

- ▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
 - ④ 大学の世界展開力強化事業
 - ・ ソウル大学校（韓国）、北京大學（中国）、シンガポール国立大学（ASEAN）と本学による「リベラルアーツ教育」を共同テーマとした大学間国際コンソーシアム（The ACE: The Asian Consortium for Excellence in Liberal Arts and Interdisciplinary Education）を形成
 - ・ ACEを基盤として、リベラルアーツ教育を基礎とした国際共同副専攻（Asian Liberal and Interdisciplinary Studies (ALIS)）を展開
- ※国による5か年度の補助事業

事業名：

The Asian Consortium for Excellence in Liberal Arts and Interdisciplinary Education (The ACE)

立教大学

国際通用性のある質の保証
および流動性の向上

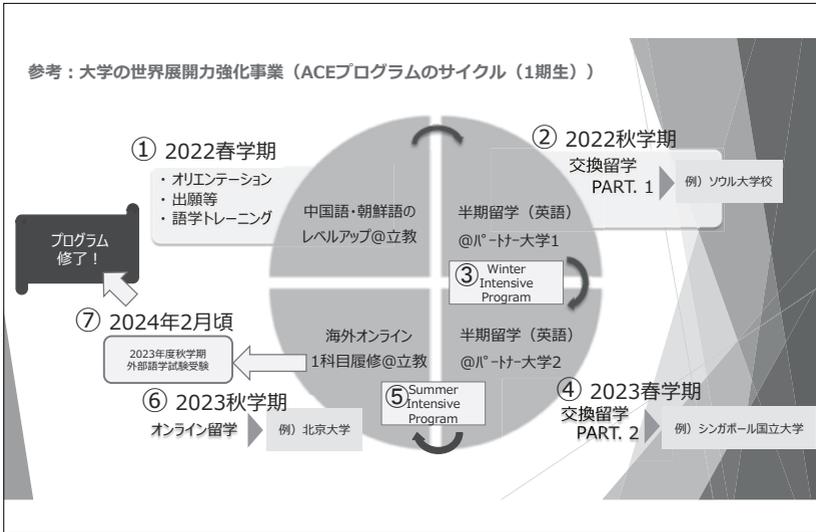
ソウル大学校

北京大学

シンガポール
国立大学

10

【スライド②-11】



【スライド②-12】

2 立教大学の国際化戦略

▶ 中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
中期計画（2022-26年）における国際化関連事業
④ 大学の世界展開力強化事業
・育てたい人材像は「アジア発未来共創型グローバルリーダー」

■ 養成するグローバル人材像

未来共創型グローバルリーダー

コアスキル (6C)

思考力

変革力

共感・協働力

アジア地域

全世界

リベラルアーツ

※コアスキル (6C)

- i Critical thinking
- ii Collaboration
- iii Communication
- iv Consilience
- v Challenge
- vi Cosmopolitan

12

【スライド②-13】

3 どのような人材を育てたいのか

- ▶ リベラルアーツ×国際化×リーダーシップ
- ・ 立教大学のベースとなるリベラルアーツ教育
 - 変化が激しく、先の見通せない世界において、なお世界を読み解き、そして世界に働きかけ、これを変えていく力を持った人材
 - より具体的には、幅広い知識や教養、そして批判的思考力をベースとして、複眼的な視点から物事の本質に迫り、チームの中での協働や意思疎通を図りつつ、問題の解決に向けて発信すべく、世界の中でその役割を果たすことができる人材（世界展開力事業で目指している6つのコアスキル【Critical thinking/ Collaboration/Communication/Consilience/Challenge/Cosmopolitan】を身に付けている人材）

13

【スライド②-14】

3 どのような人材を育てたいのか

- ▶ そのようなリーダーを育てるために立教大学が用意する環境
 - ・ 学生を積極的に海外に送り出す取り組み
 - ・ 外国からの留学生を積極的に受け入れる取り組み
 - ・ 学内で学ぶにあたって、リベラルアーツ教育、複言語による教育をベースとし、常に異文化体験を得られるような取り組み
 - このような取り組みを実行することにより「自ら考え、行動し、世界とともに生きる」新しいグローバルリーダーの育成（TGU事業の目標）、そして「アジア発未来共創型グローバルリーダー」の育成（世界展開力強化事業の目標）も可能となる

14

【スライド②-15】

